こまざわ経済通信

発行
駒澤大学経済学部
同窓会
〒154-8525
東京都世田谷区駒沢
1－23－1

# 迫られる大学改革

経済学部長　小栗　崇資

経済学部は現在、若返りの最中にある。特色ある経済学部カラーを作り上げてきた先生方が６、７年の間に次々と退職され、それに代わって新進気鋭の若手の教員を受け入れていくことが必要となっている。この期間は、大学の制度や教育システムの全般にわたって改革が求められる時期とも重なっている。東京オリンピックが開催される２０２０年を前後して（２０１８年からとも言われる）、１８歳人口は現在の１２０万人から８０万人に激減していくことが予想されるからである。当然のことながら、大学入学者を確保するための大学間の競争は激しさを増すことになる。すでに現在、定員割れしている地方の私学は存続の危機に立たされること必至であろう。

駒澤大学はこれまでのところ受験者、入学者を順調に確保してきており危機感は薄いが、こうしたまだ余裕のある時にこそ、改革に取り組むことが重要である。もちろん自力で出来ることと出来ないこともある。例えば少人数教育である。世界の大学は圧倒的に少人数教育を実現してきている。２０～３０人規模の教室で教えるのは普通のようである。フィリピンの大学では４５人以下で教育するように政府が定めているという。少人数であるので、教育方法も双方向型となり、事前の予習をもとに毎回、ディスカッション、ディベートがなされるようである。日本の私立大学で何百人の一方的な講義を行っていること自体、世界から見れば時代遅れの教育に写るであろう。私たちも現在、出来るところから実施しようと試みているが、これを全面的に自力で実現するのは困難である。

何ができるか模索中であるが、これまでのところ初年次教育の改革や半期制の導入などに着手してきている。従来は学生の個性を尊重して自由放任型のカリキュラムであったが、現在はますます幼くなる学生に対して、手取り足取りの教育が求められている。少人数の新入生セミナーで大学の勉強と生活に慣れるように指導することから始まり、前期と後期で試験を行い、学生たちの学習をきめ細かく指導するなどしている。将来を見据えてさらに学部の改革に取り組んでいかねばならないが、まだまだ課題山積といわなければならない。２０年の東京オリンピックを迎える時に駒澤大学および経済学部の名がさらに輝くよう同窓の皆さんからもご支援いただければ幸いである。

# 卒業生シリーズ

## 大学生活の記憶
### ー佐々木監督とわたしー

静岡県立土肥高等学校教諭　伊東　秀幸
（平成２０年度経済学科フレックスＡ卒業）
（平成２２年度商学研究科商学専攻修士課程終了）

ついに、駒大苫小牧が甲子園に帰ってきた。この日を待ちわびていた者は少なくないだろう。私もその中の一人だ。そして、駒大苫小牧高校野球部を率いる彼こそが、私の大学生活を語る上で欠かすことのできない人物の一人である。

いまから１０年前の夏、深紅の大優勝旗が初めて津軽海峡を越えた。春夏を通じて初となる北海道勢の優勝であった。歓喜に沸くグラウンドの中心に、彼の姿はあった。当時の駒大苫小牧高校野球部主将・佐々木孝介だ。夏の甲子園を制した野球部の主将として、瞬く間に日本中が注目する選手となった。当時の私にとっては遥か遠くの存在であったが、約半年後に出会うこととなる。

翌年の４月、指定校推薦が縁となって、私は経済学部経済学科に入学した。入学式当日に手渡された袋の中には『駒大スポーツ』があった。ふと目をやると、「大学でもＮｏ．１」という見出しで、彼に関する記事が一面に掲載されている。同じ新入生ではあるが、桁違いの扱いだ。一方で、彼も同じく経済学科であることに気が付く。もしかすると、同じ講義を履修しているのではないか。密かに期待を寄せた。

講義が始まって数週間、彼が東都大学野球春季リーグ開幕戦で５番・遊撃手として先発し、３安打を放って華々しくデビューした後のことだ。「仏教と人間」の講義で、初めて彼の姿を目にした。恐れ多くも、図々しく声を掛けた。これが、孝介との出会いである。

その後、孝介はゼミの仲間となる。かつては遥か遠くの存在であったが、互いに教員を目指していることもあって意気投合した。そして、指導教授である浅野克巳先生の計らいで同じゼミの一員となった。志を同じくする仲間と過ごした記憶は、卒業したいまも忘れることはない。孝介が甲子園で指揮を執る姿を夢見て、講義内容を必死に教えた。締め切りの迫った卒業論文も徹夜で協力し、完成の祝杯を挙げた。その甲斐あってか、自身が全学部の首席で卒業することもできた。ある日、孝介はこう言っていた。

「この繋がりは、卒業してからも大切にしたいと思っている。」

３月２２日、阪神甲子園球場で孝介と５年ぶりに再会した。第８６回選抜高等学校野球大会第２日の第１試合、駒大苫小牧（北海道）対創成館（長崎）を観戦したときのことだ。その表情は５年前よりも指導者らしく、監督として見事に甲子園での初陣を飾った。私は自身のことであるかのように喜んだ。

試合後、宿舎で食事をともにした。あの言葉は本当であった。大学生活の思い出や互いの近況で話が盛り上がり、教員という仕事のやりがいについても語り合った。

「生徒と一緒になって、泣いたり笑ったりすることができるのって、教員の仕事しかできないよなあ。」

毎年４月、全国から様々な経歴を持った学生が大学へ入学する。そして、ゼミの活動を通じて、何年経とうとも忌憚なく語り合える仲間に出会う。これこそが、大学生活の醍醐味と言っても過言ではない。

チャンスでサインを送る佐々木監督

宿舎にて撮影。試合後の佐々木監督

右から佐々木監督、筆者

## 第7回:経済学部同窓会総会のご案内

下記のように総会を開催致しますので、ご多用の折と存じますが御出席をお願い致します。

同窓会員のほか、商経学部・経済学部のすべての卒業生がオブザーバー参加できます。お誘いあわせのうえ御出席ください。

**日　時**
**平成26年11月1日（土）、13時開会**

**会　場**
**1−203教場（1号館2階）**

◎総会終了後、「ホームカミングデー懇親パーティ」（15時開宴、学生食堂）に参加できます。
◎当日は「ホームカミングデー」、「オータムフェスティバル」（大学祭）も同時開催されます。

# ゼミ紹介

## 瀬戸岡ゼミ

経済学科４年　志賀　遥香（ゼミ長）

瀬戸岡ゼミには、現在、３年生６５名、４年生３９名、計１０４名が在籍しています。３年生は、通常のゼミ活動（今年は経済理論の修得に力点をおいている）のほかに、自主活動としてのサブゼミが例年のように多数開設され、社会問題、商品開発など今年は六つのテーマにチャレンジしています。４年生は卒業論文の作成と同時に、就職活動にも奮闘しています。経済学部の枠にとらわれず、自己の成長につながる多種多様な企業に挑戦し、ＯＢ・ＯＧをはじめ沢山の方々にご指導を頂いてきたおかげもあって、すでに６月時点でほとんどのゼミ生が内定を頂いています。その他、昨年はゼミ内に東日本大震災の復興支援を行う学生団体が発足し、今年も継続して活動するなど、瀬戸岡ゼミは多様な活動を学生主体で元気に行っています。

瀬戸岡紘先生は、国際的にも幅広く活躍され、諸外国で開催される学会で毎年研究発表をなさっており、昨年度は世界政治経済学会から「２０１３年度政治経済学賞」を受賞されました。また、共著書の出版のほかに、論文やエッセイを数多くお書きになり雑誌に掲載されるなど、多彩に活躍なさっています。

そんな瀬戸岡先生も２０１６年３月をもって定年ご退職となり、瀬戸岡ゼミも現３年生の第３８期生をもって終わりを迎えることになります。ゼミ卒業生は最終的に１２００名を超え、日本の大学史上最多になると見込まれています。

そこで、この豊富な人脈をさらに有効に活かしていくために、今年と来年のＯＢ・ＯＧ会は、特に盛大な会にしようと計画しています。学年の離れた者どうしも、楽しい歓談と名刺交換などをつうじて、相互に最新の動向を知り合い、各自の将来の仕事と生活のために有効な絆を強めたい、というのがねらいです。もちろん、先生ご勇退後も同窓会のような集まりが続けられるよう、その礎にもしたいと考えています。今年は１１月２２日（土）、来年は１１月２１日（土）、学内にて行います。多くのＯＢ・ＯＧにおいでいただき、ともに楽しく語りあう機会となるよう、在校生一同、期待を膨らませているところです。

# 研究室訪問シリーズ

宮　田　　惟　史（専任講師、２０１３年就任、経済学史担当）

２０１３年度より駒澤大学経済学部経済学科に着任しました、宮田惟史と申します。主要担当科目の「経済学史」では、Ａ．スミスやＫ．マルクス、Ｊ．Ｍ．ケインズ等々の主要な経済学説の形成過程や理論内容を講義しています。現在も存続する資本主義経済を分析した各々の経済学者たちの学説を理解することは、現代の社会システムを分析するための基礎になります。ゼミナールでは、経済学の歴史や基礎理論を学びながら、その一方で現代社会が直面している諸問題（例えば雇用問題、経済不況等々）への理解も深めています。

現在の主な研究対象は、古典派経済学およびそれを批判的に継承したマルクスの経済学説です。周知のようにマルクスは主著『資本論』のなかで、当時のイギリス社会の現実をつぶさに観察するとともに、古典派経済学（スミスやリカード）やそれ以降の通貨学派や銀行学派等の理論を摂取することによって、資本主義経済の総体を徹底的に分析しました。

ところで、マルクスが生きた１９世紀の資本主義経済は新たな問題に直面していました。そのひとつが、１８２５年からほぼ１０年周期に生じた恐慌（不況）です。古典派経済学の代表者であるスミスやリカードの時代にはまだ本格的な恐慌は生じていなかったので、彼らはそれを直接分析しませんでしたが、それ以降の経済学は、恐慌・景気循環がなぜ生じるのか、そのメカニズムの解明に迫られたのです。

マルクスは、いわゆる「セー法則」に基づき恐慌の可能性自体を根本的に否定した従来の学説を批判し、資本主義経済そのものが孕む矛盾に着目し、なぜ資本主義経済では恐慌や金融危機が生じるのか、という問題を立てその究明に取り組みました。私の研究のひとつは、こうしたマルクスの分析を正確に把握することを通じて、この問題をその最深の基礎から再考することです。ここでその内容に立ち入ることはできませんが、近年マルクスの恐慌論・信用論（金融論）の内容を含む『資本論』第２巻・第３巻に相当する草稿（ＭＥＧＡ）が出版されたことによって、その原文そのものを直接読むことができるようになりました。そこで現在、マルクスの経済学説の再検討が迫られているのです。

経済学の分野では近年、学生のみならず研究者のあいだでも「古典離れ」が急速に進行していますが、時々の「流行」の理論に流されるのではなく、自分の頭で原典をきちんと読み、主要な経済学説を再把握することが必要な時代になっているのではないかと思っています。

# インターシップを体験して

経済学部の特色ある科目の１つに「ビジネス・インターンシップ」があります。これは３年生が前期（半年）は教場でビジネス・マナー等を学び、夏季休暇に企業、官公庁、学校、ＮＰＯ、ボランティアなどで就業体験をする科目で、修了者には単位が認定されます。就業体験によって大学で学ぶ意義を考え、将来の職業選択の指針にすることを目的にしています。単位認定科目としてインターンシップを実施しているのは経済学部だけで、全国の大学でも数少ない取り組みとして注目されています。

実習後に提出されるレポートには、緊張しながら意欲的に実習に励む様子や、働くことをつうじて考えた勉学のこと、仕事の意味、生きがい等が書かれ、就業体験によって大きく成長していく過程が示されています。

インターンシップは多数の企業・団体の御好意によって実施されており、経済学部同窓会員よりご紹介いただいた実習先も含まれています。今後とも経済学部教育への御理解とご支援いただき、インターンシップへの御協力をお願い致します。レポートのいくつかを紹介します。

＜実習先＞　会計事務所：経済学科３年　Ｔ・Ｓ

私がこのインターンシップに行こうと思ったきっかけは、会計事務所で働く人が普段どのような仕事をしているかを知りたかったからです。仕事内容はインターネットや本で大体はわかっているつもりだったのですが、実際に事務所に行ってみて、思っていたことと実際の仕事は違っていて衝撃を受けました。私は簿記の勉強をしていて少しは知識があると思っていたのですが、実務と普段の勉強でのやり方の違いに驚きました。それを自分なりに経験することができてよかったです。他にも帳簿記入したものがお客様の経営に直結するとか、知識を提供しているので間違えれば信用問題になることなど、今まであまり考えたことのないことを知り、この仕事の責任は重大なのだと感じました。・・・税理士は決算書を見ればいいのではなく、お客様と１対１で話し合う人と人の関係が大切であること、
また相手の求めるものを聴き出すことで信頼関係が築けることなど、人との関係が重要な職業だと教わりました。

このインターンシップで自分の興味のある分野、業界を実際に体験しながら学べたことが貴重でしたし、自分が将来働く姿を少しでも思い浮かべられるようになったことが、一番の収穫だと思いました。

インターンシップの実習先をご紹介ください。
連絡先：経済学部同窓会事務局（経済事務室内）
電話：０３－３４１８－９３４３

＜実習先＞　人材派遣会社：経済学科３年　Ｓ・Ｓ

社会人の「日常」は私たち学生の「非日常」でした。規則正しい生活、時間遵守など、私たち大学生の生活は社会人の方々の生活と最も遠くに位置している気がします。なにより、今まで味わったことのない「責任」と「緊張」で押しつぶされそうな自分を自ら奮い立たせて「はたらく」という経験が、私の日常にはないものでした。

生活リズムを整えることの難しさ、身体的疲労、感じたことのないほどの緊張、この５日間で学んだことはたくさんありますが、一番強く感じることは「楽しかった」ということです。楽しかったと感じることができたのは、きっと私が全力で仕事に向き合うことができたからではないかと思います。この５日間で私が見つけた「はたらく」の意味は、「やりがいを持って仕事を楽しむこと」です。今回のインターンシップで学んだことをしっかりと自分の中で消化し、考え方や心のあり方の面で以前より充実した日々を過ごすことができればと思います。貴重な体験をありがとうございました。

＜実習先＞　特別養護老人ホーム：現代応用経済学科３年　Ａ・Ｍ

今までは正直、介護の職には興味を持てませんでした。それに、私の母は介護施設の准看護士として働いていたため、仕事の内容はもちろん利用者の個性なども聞かされていましたが、実際に働いてみると体力はもちろんのこと、それ以上に神経疲れする職場だと思いました。しかし不思議と楽しさややりがいを感じる自分がいて驚きました。休憩の合間をぬって数名の従業員の方に、「なぜ大変なこの職に就いたのですか」といった質問をさせていただきました。もちろん大変ではあるが仕事と割り切っていると共に、利用者の方と接するのが楽しいと皆さんおっしやられていました。確かに従業員の方々の利用者さんに対する接し方はすごく自然で、会話するときは優しく温かい笑顔をされていました。きっと、こういう表情ができるのは介護の職にやりがいを感じているだけでなく、利用者の方の素直な感謝の気持ちや笑顔からも引き出されているのだと働いている中で思いました。また介護職にとって大切でありなおかつ必要なことは、体力やコミュニケーション能力といったことはもちろんですが、人間観察の鋭さだとわかりました。・・・

今回の経験から外から得る企業の印象と、実際に中で働いて得る印象とでは大きな差があることがわかり、本当に自分にその職がむいているかを改めて考える体験となりました。事実、私は今回の体験で人との関わりの少ないＩＴ関連の企業や運送関係の仕事よりも、人との信頼関係をつくりあげていく職がむいていることを知りました。これだけでも、介護施設でボランティアをしてよかったと心から思います。

（『駒澤大学経済学部：インターンシップ報告集：平成２４年度』より引用）

## 経済学部同窓会事務局からのお知らせ

１．第７回：経済学部同窓会総会の開催
　日時：平成２６年１１月１日（土）、１３：００開会　　会場：１－２０３教場（１号館２階）
　３年ごとの総会を「ホームカミングディー」と同日に開催します。同窓会員のほか、商経学部・経済学部のすべての卒業生がオブザーバー参加できます。お誘いあわせのうえご参加ください。

２．同窓会の組織強化にご協力ください
　同級生、ゼミやサークルの仲間、地域のお知り合いで「経済学部同窓会」に加入していない方をご紹介ください。紹介いただいた未加入の方に、事務局から入会案内をお送りします。

３．経済学部同窓会のホームページをご覧ください
　経済学部同窓会のホームページに次のようにアクセスできます。

駒澤大学のホームページ(TOP) → 学部・大学院 → 経済学部 → 学部・学科・研究科作成のページ → 経済学部同窓会

経済学部同窓会事務局（経済事務室内）
〒１５４－８５２５　東京都世田谷区駒沢１－２３－１　電話：０３－３４１８－９３４３

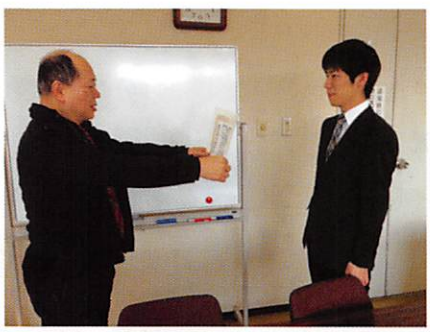
# 経済学部同窓会長賞に輝く９名

平成２６年３月２５日に行われた卒業式で９名が経済学部同窓会長賞を受賞し、賞状と記念品（万年筆）を授与されました。

在学中勉学に励み、優秀な成績を収めたばかりでなく、人物においても優れた学生に授与される賞です。

受賞の自信と誇りをもって、今後は社会人として活躍されることを期待しています。

経済学科：玉村契悟、深谷絵美、三澤貴之
商学科：中島雅人、大澤浩紀、大竹咲紀
現代応用経済学科：星野裕介、鈴木彩乃、土居純季


経済学科：玉村契悟

経済学科：深谷絵美

経済学科：三澤貴之

商学科：大澤浩紀

商学科：大竹咲紀

現代応用経済学科：星野裕介

現代応用経済学科：鈴木彩乃

現代応用経済学科：土居純季